



フクシマの視点

[日経ビジネス オンライントップ](#) > [IT・技術](#) > [フクシマの視点](#)

ルワンダ生まれ、福島と生きる

内戦と原発事故、“難民”だから分かり合える

2011年8月17日 水曜日 藍原 寛子

ディアスポラ(diaspora)——。戻れる地域がなくなり、安全な土地を求めて転々とする「離散定住集団」のことである。

原発事故が収束するメドが立たず、放射能の影響も分からない中で、住民が安全や安心を求めて転々と移る「ディアスポラ的状態」になる可能性を懸念する声が、被災地域の人々や行政担当者から聞こえてくる。その上、原発周辺の市町村役場自体も、本来の地域から離れて臨時支所を開設、このまま住民が分散し続ければ、自治体が解散したり合併する可能性もある。

県によると、4万6000人を超す人々が福島県を離れて暮らしているという。ただし、行政に届け出していない人の自主避難者や一時疎開・避難者もカウントされれば、実態として行き場を模索している“潜在的難民”や“ディアスポラ”の数は相当膨れ上がるはずだ。

国は、各地での除染活動で放射線量が低減されれば、原発から20km圏外の緊急時避難準備区域を解除して、住民が戻れるようにするとの方針を示している。しかし、目に見えない、しかも何十年後かに出る可能性がある放射性物質の影響は読み切れず、既に避難先で新しい生活を始めた住民もいる。国や自治体でゴーサインが出されてもすぐに住民が戻るのかは不透明だ。

福島市に住んで約17年

長期化する避難生活の中で、いまだ7万人以上の県内避難者は、何を将来のよりどころにしていっていいのか。先が見えない絶望感や虚無感をどうしたらいいのか。そう考えた時、1人の女性のことが頭に浮かんだ。民族紛争による内戦が繰り返されたルワンダで、虐殺(ジェノサイド)を逃れて難民となったカンベンガ・マリールイズさん。その後福島市民らの支援で来日し、福島市に住んで約17年になる。



虐殺を逃れ、福島で暮らして約17年のカンベンガ・マリールイズさん

「ルワンダは内戦、フクシマは震災と原発事故と、原因は違っても、突然に起きた出来事で家や家族などすべてをなくし、自分が住み慣れたところを離れて生活するのは同じ。それまでの生活が一気に終わった。だからよく分かる」。

震災直後、ルワンダ大使館からマリールイズさんに「福島を出るように」との連絡があった。高校生の末娘は九州に避難させたが、自身は福島にとどまり、近所の人と助け合って過ごした。

その間、スカイプやメール、電話などで、英国の公共放送局BBCやルワンダのラジオ局などメディアの取材を受け、ルワンダ語から英語、フランス語、スワヒリ語で、福島の様子を次々と海外にレポートし続けた。「『福島で水が出るようになった』とか、『店も開き始めた』とか、『放射能の関係で、マスクをして外に出るようになって、無駄な外出はしないようにと日本の政府から指示が出ている』ことなどを伝えた」という。

がれきじゃなくて、私と共に過ごした家の壁

マリールイズさんは青年海外協力隊の現地協力員として日本を訪れ、福島文化学園で洋裁の研修を受けた後、1994年2月にルワンダに帰国。ところがその後、内戦が激化し、家族ともども難民となった。隣国コンゴの難民キャンプで過ごす中、海外の医療活動など人道支援をしているAMDA(アムダ、本部・岡山県)の日本人医師と遭遇した。

通訳をしながら、危機的状況を福島の友人に訴えたところ、友人たちが支援活動を展開してくれた。そして、市内の桜の聖母短大への聴講生としての受け入れがかない、無事来日を果たした。

当時私は、地元の新聞社に勤めており、マリールイズさんを救い出そうという活動の様子を同僚の記者と取材した。福島の人たちが結束して熱心に支援したのを今でも覚えている。

福島で生活するようになったマリールイズさんと、支援する友人はその後、「ルワンダの教育を考える会」を立ち上げ、ルワンダに「ウムチョムイーザ学園」を設立。現地の子どもたちの教育支援を行っている。

震災後は、南相馬市など避難所でのボランティア活動も行っている。避難者にルワンダコーヒーを提供したり、避難者の話を聞く傾聴や対話活動をしたりといった具合だ。

「全部流されたけれど、この服だけは私を見捨てなかった」。そう言って泥から引き上げてきた服を抱きしめた女性。

「がれきと言ってほしくない。がれきじゃなくて、私と共に過ごした家の壁だから」と、しみりと語る人々。

マリールイズさんも、自分の結婚式の写真が奇跡的に1枚だけ見つかって、今でも大切に飾っていることなどを話していく。

マリールイズさんの友人がフルート演奏をする中、ルワンダコーヒーで心も解けていくのか、南相馬市の避難所の人々は、肌の色も文化も違うマリールイズさんに自らの体験を吐露する。

がれきの下に、まだ見つかっていない親戚がいるかもしれないという思い。「がれきじゃないよ」。そしてまたコーヒーを一口、「すべてなくなったけれど、生きているから再スタートが切れるね」。

また夜に来てください、夜に話がしたい

マリールイズさんの難民生活は突然やってきた。家を離れ、当時2歳、4歳、6歳の子ども3人を連れて安全な土地を求めて逃げて、気が付いたら隣国コンゴに入っていた。難民キャンプで見知らぬ人と隣り合わせの慣れない生活、赤痢などの病気との戦い…。避難しても安心できる生活が送れなかったという。兄は行方不明。心の中ではもう亡くなったのだらうと思うが、兄への想いは残したままだ。

「逃げるために家を出た時、2日もすれば家に戻れると思った。それが、逃げているうちに国境を越えて隣国まで行っていた。日本では避難所にすぐ水や食べ物が届けられたが、アフリカの難民キャンプは全く違った。海外の非営利団体(NPO)など海外支援が入って、落ち着いて生活ができるようになるまでは、自力で生きていけないといけなかった」。そんな話をしながら、フクシマの避難者と、体験や想いを分かち合っている。

南相馬市で避難生活を送る女性がマリールイズさんに言った。

「できたら、また夜に来てください。夜に話がしたい」

「私は分かるんです、なぜ夜なのか。夜は津波の夢を見るから。眠れないから。でも『夜にこんな会話ができれば眠れる』と。その気持ちが痛いほど分かる。難民キャンプで『夜がこないように』と祈った自分がいたから。いつでも襲われる不安があって、本当に夜が怖くて。朝がきたら夜まで生きられるか不安だった」

この子は将来、人を助ける人間になる

同じ思いを持つマリールイズさんへの安心感か、最近はお母さんたちから、子どもへの放射能の影響や自主避難などについて相談を受けることが増えているという。「放射能の影響はすぐに出るのではなく、何年か経って出てくるが、このまま福島に居ていいのかという不安がある」という。

福島の人々の「忍耐強さ」は美徳でもあるが、支援してほしい時にはSOSを出すべきだともアドバイスする。

「大変さを味わっているのは1人じゃない、苦んでいるのは1人じゃないから、私はあえて『大変だ』と口にしました。そして助けてくれる人には『助けてください。ともかく、子どもたちを安全なところに連れて行って』と声

を高く上げた。助けてということは恥ではない。仲間は助け合うためにいるから、喜んで助けられる人になれば、こんなに幸せなことはない」

「未来のある子どもは、何の条件も付けずに、どうしても守らなければならない。それは子どもの権利であり、大人の義務だと思う。私は幸いにも日本で子育てができた。子どもたちの安全があれば何にもいない。子供たちの明るい将来、希望のある未来を作るには、私の子どもたちだけではできないから、子どもたちみんなが幸せに暮らす環境を作っていきたい」。

そして、こう続けた。

「この子は将来、人を助ける人間になる。子どもの今を見るのではなく、将来を見てほしい。あなたを安全なところに連れて行くためにここに来たと説明したら、理解できない子どもは絶対にいない。いろんなお母さんの声を聞いたたびに、私は『何も考えないで』と言っている。福島のお母さんも気が休まっていない。『あちこちに甘えていいから。受け入れが2年しかないといっても2年あれば変わってくる』と」。

生きる希望を取り戻してくれたのが福島

マリールイズさんは、日本政府の対応についてはどう見ているのだろうか。

「突然起きたことで、誰も対応の仕方を知らなかったと思う。政府が一生懸命やっているのは評価したい。ルワンダの内戦も突然起きて、国際社会の力を借りて修復していった。日本も同じ。日本では、原発を作ってビジネスのため、モノ作りのために、確実なものとしてエネルギーを使うと思っていた。思っていたけれども、原発は全く違うものになっていて、今や、住民生活を脅かすものとなっている」

「安全なものに修復する技術が開発されているかもしれないが、子どもの成長はその間も止まてはいない。どんな政策にしても、子どもたちの安全を第一に考えてほしい。まずは子どもを避難させて、安全を確保した上で、原発の修復に全力を傾けるということができないだろうか」。

このように、まず子どもを避難させるなど、安全確保を最優先にした原発事故の早期収束を訴える。

答えにくそうなことも、聞いてみた。

「せっかく難民キャンプから逃れて日本に来たのに、福島でまたこんなことがあって、住む場所が福島でなければよかったという思いはないか。別のところだったら良かったと思わないか」と。

即座に言葉が返ってきた。「それはない。福島が私に夢をくださった。生きる希望を取り戻してくれたのが福島だから」。

「震災直後、私たちは近所の人たちと、水や持っているものを分かち合って過ごした。福島で良かったと一生思っていくでしょう」。福島の人と共に震災を生き延びた体験が、マリールイズさんのこれからの活力にもなるのだという。

そして「私の考え」と前置きし、「これからの未来は間違いなく修復すると信じている。新しいものができる時、革命でも改革でも、そこには必ず犠牲者がいた。私たちが体験したことをステップにして、抱えるべきではないものの存在に気付いたのではないか。原発を良いものだとしか考えていなかった人たちが、危険なものとして見てくれるようになったら幸い。住民が放射能におびえて暮らしているということも分かってほ

しい。将来、人々を脅かすものを作ってはならない、たとえ良いものであっても、手を付けるべきではないということも」。

もうすっかり「フクシマの人」

時折考える。「ルワンダの内戦も体験して危機的な状況から逃げられたのに、また福島でこういうことになるとは、私の人生はいったいどうなっているのか」と。しかし「命をいただいたことが、新たな希望になる。震災後、福島、岩手、宮城で生き残った私たちが世界に何を伝えるべきなのか。ルワンダの人たちにも、教育や平和の大切さを訴えている。私が変わられるのは、大河の中のたったの1滴分かもしれない。でも1滴は1滴でゼロではない。その1滴が別の1滴を生むと信じている。私自身は1人ではなくて、助け合うために仲間がいることも」。

17年前にジェノサイドの真っ只中から、家族を連れて命からがら福島に避難し、生き延びてきたマリールイズさん。全国での講演活動、ボランティア活動を通じながら、苦難の後の未来や希望について、多くの人々と体験を分かち合っている。マリールイズさんの流暢な日本語は、福島弁も少し混じって何の違和感もない。

「この子は将来、人を助ける人になる。子どもはその国の未来につながる」。マリールイズさんは将来を憂いながらも、日本や福島の子どもや未来に期待している。インタビューの最初から最後までマリールイズさんは、もうすっかり「フクシマの人」だった。

[このコラムについて](#)

フクシマの視点

東日本大震災は、多数の人命を奪い、社会資本、自然環境を破壊したが、同時に市民社会、環境、教育、経済、政治や行政など、各分野に巨大なパラダイム・シフトを起こしている。我が国はどのような社会を志向していこうとしているのか。また志向していくべきなのか。「原発震災」で、社会の姿が大きく変わりつつある福島、震災のフロントラインで生きる人々の姿から、私たちの社会のありようをグローバル(グローバル+ローカル)な視点で考える。

[⇒ 記事一覧](#)

著者プロフィール

藍原 寛子(あいはら・ひろこ)



フリーランスの医療ジャーナリスト。福島県福島市生まれ。福島民友新聞社で取材記者兼デスクをした後、国会議員公設秘書を経て、現在、取材活動をしている。米国マイアミ大学メディカルスクール客員研究員として米国の移植医療を学んだ後、フィリピン大学哲学科客員研究員、アテネオ・デ・マニラ大学フィリピン文化研究所客員研究員として、フィリピンの臓器売買のプロローケージシステムを調査した。現在は福島を拠点に、東日本大震災を取材、報道している。フルブライター、東京大学医療政策人材養成講座4期生、日本医学ジャーナリスト協会会員。

日経BP社

日経ビジネス オンライン [会員登録・メール配信](#) — [このサイトについて](#) — [お問い合わせ](#)
日経BP社 [会社案内](#) — [個人情報保護方針/ネットにおける情報収集/個人情報の共同利用](#)
— [著作権について](#) — [広告ガイド](#)

© 2006-2011 Nikkei Business Publications, Inc. All Rights Reserved.